

## 120. 演壇の背後霊

村上 孝雄

今年も下水道研究発表会（研発）の季節になりました。筆者も若い頃には、毎年のように研発で発表したものです。このような場で発表した経験をお持ちの方は、読者の中にも多いことと思います。大勢の聴衆を前に発表するのは緊張するもので、特に制限時間内に自分が伝えたいことを要領良く話せるようになるには、何と言っても場数を踏むことが大事です。

さて、このような発表の場には必ず座長がいます。座長の役割は、発表時間管理、質疑応答の司会、また、質問が出ない時には自ら質問をする等、結構忙しいものです。

筆者も研発を始め、国内外の学会で何度も座長を務めました。とかく時間オーバーになりがちなので、座長は時間管理に一番気を使います。この点、日本人は真面目に事前練習し、きちんと発表して時間どおりに終わることが多いので、座長にとっては誠に楽です。

ただし、海外では必ずしもこういう訳には行きません。私の印象では、ラテン系の国の演者（発表者）は時間にかなりおおらかです。中には冒頭の研究目的の説明でその重要性を熱っぽく語り、いつ本題に入るのかなと思っていると、案の定、肝心の研究結果を説明する時間が無くなってすごすごと退場する演者も見かけます。

演壇には大抵タイマーがあり、演者はこれで残り時間が分かるはずなのですが、発表に熱が入ると、それも見えなくなって時間オーバーすることもしばしばです。このような場合には「時間ですから終わって下さい。」と言えば良いのですが、発表中に割って入るのはあまりスマートではないので、時の経つのを忘れて夢中で話している演者を如何にうまく終わらせるかが座長の腕の見せ所になります。

私が最も効果的だと思っている方法は、「背後霊方式」です。これは残り2分位のタイミングで座長が席を立て、そと演者の後ろに立つやり方です。この場合、立ち位置が重要で、発表の邪魔にならず、かつ、演者の視界の端にチラッと入るような位置でなければなりません。どんなに発表に夢中になっている演者でも、座長が背後霊のように自分の後ろに立っていることに気づくとさすがに止めざるを得ません。それでも止めない場合には、軽い咳払いをするか、「時間です」と書いた紙片を後ろからそと差し出せば決まりです。

この「背後霊方式」は穏便なやり方ですが、アグレッシブな方法をとる座長もいます。以前、参加した海外の学会での座長さんは、時間が1分半ばかり超過した時、いきなり演者を睨み付けながら、ボールペンで座長席の空コップを容赦無く乱打し始めたのです。会場には「チンチンチンチン」という甲高い音が響きわたり、もちろん発表は即刻終了となりました。これは効果<sup>てきめん</sup>観面ではありますが、協力して実りある情報交換の場を作るべき座長と演者の人間関係にヒビが入るリスクはきわめて大きく、お勧めできない方法です。

良いアイデアだと思ったのは、昨年3月にドイツで開催された会議で見た信号機です。写真の演者の右の方に信号のついたポールが見えます。駅の千円理髪店にある混雑具合を

表示する信号と似ています。これが初めは青色、次に黄色になり、時間が来ると赤色になるという仕組みです。これは演者のみならず聴衆からも良く見えるので効果的ですが、我国では抵抗を感じる演者が多そうな気がします。

やはり、日本の気候風土には「背後霊方式」がよろしいのではないかと思います。特にこれから夏を迎えますので、「背後霊方式」を導入すれば、発表で熱くなっている演者も一気に涼しくなるのではないのでしょうか？



ドイツの会議での信号機